

シリーズ多文化教育実践 第1回

シルクロード音楽の旅：楽器を通して

講演&コンサート

長崎大学 王 維

1 企画の趣旨

The journey of Silk Road instruments 講演&コンサート

日時：2015年12月10日（木）16：10～17：40
場所：長崎大学文教キャンパス 創礼堂

【プログラム】

粉紅蓮（ふんこうれん）（中国独奏）
伝統的潮州（広東省）歌曲の一つであり、「踏歌調」ともいう。華の繊細な技法を用いて、途中の蓮花の美しい姿を描く。どんな汚れた環境にあっても、蓮の花のように純潔を保つ境地を表現する。

彝族舞曲（いぞくぶきょく）（中国琵琶、箏の二重奏）
代表的な現代曲の一つ。少数民族（いぞく）の若い男女が取り纏りの場面を表現する。

Intermission
piri（竽簫）、xiao（簫）、duduk（ドッドック）、nay（ネイ）、bawu（巴烏）、midweh（エジプト楽隊、シングルリードのダブルパイプ）

十面埋伏（じゅうめんまいふく）（中国琵琶独奏） 中国古典名曲
琵琶古典曲の中で最も代表的な曲である。紀元前202年の、楚の国と漢の国の決戦の場面を表現する。大軍の布陣する有様、軍太鼓やラッパの響き、何万頭の軍馬が入り入れて走り回る光景が、神業とも言われる琵琶の技法を駆使して描かれる。

紙胡精合（久世旭如作曲）筑前琵琶&箏
『平家物語』の音韻を用いた筑前琵琶の曲。

橋本吉彦
Kandy Kone-Rauko
韓梅 (Han Mei)
王維 (Wang Wei)

シルクロード音楽の旅
楽器を通して

「シルクロード音楽の旅：楽器を通して 講演&コンサート」(The journey of Silk Road instruments) は、「世界を知り、日本を知るⅡ」モジュールの「芸術で見る世界と日本」という全学教養教育科目授業の一環として、企画したものである。

地球に暮らすあらゆる民族は、異なる自然環境、言語や宗教或いは歴史や社会などの環境に対応し、周辺の民族と交流しながら、その社会でのアイデンティティに支えられた固有の祭礼、芸能、音楽を培ってきた。民族音楽学の観点から、東アジア地域を中心とする多彩な祭礼、芸能や音楽を通して様々な世界を見る視点を学ぶという趣旨から、授業の内容の一部としてシルクロード音楽を取り

り上げた。

シルクロード音楽は、2千年以上前に拓かれた交易路——中国の特産物「絹」を西方世界に運んだ隊商路——を通じた東西の音楽文化の出会いにはじまる。東西音楽の交流の結果として生まれたアジアの歌舞音曲および楽器の伝播と変容のダイナミックな諸相など、いわゆる古来アジアとヨーロッパをつなぐ東西の交易路および南北の連絡路の沿線から広がった地域の音楽がシルクロード音楽である。

文化（音楽）の越境は遙か昔から始まっていた。中央アジアや西アジアで生まれた音楽文化は、シルクロードを通り、中国、そしてはるばる海を越えて日本に伝わり、中国と日本の音楽的伝統の重要な部分を構成した。それらの音楽はそれぞれの自然、社会、生活、文化背景によって変容し、伝承され、豊かで多様性に富むものになっている。

一方、民族音楽学者田辺尚雄が「世界最古の音楽文化は中央アジアに起こったのであり、ギリシアから西に流れて行ったのが、西洋音楽、シルクロードを通過して東に流れて行ったのが、東洋音楽となる」¹と指摘したように、多様性を孕んだ世界の民族音楽には、原点に遡れば、共通の繋がりがあることがわかる。今回の催しは、こうした越境する音楽のダイナミズム（多様性）の諸相と、今後平和的共生が求められる世界を作るためのつながりとしての音楽の役割を、楽器を通して俯瞰することを目的とした。

2 企画の経緯

「芸術で見る世界と日本」という全学教養科目（モジュール）は、2015年度にはじめて開講された科目であり、担当者には授業のための30万円の助成金が与えられた。その資金を如何に活用できるか検討を重ねた結果、企画者（王）自身も中国音楽の演奏家であることから、最終的に民族音楽の授業に最もふさわしいプロの演奏家によるコンサートを開催することになった。中国或いは日本で活躍している中国音楽の演奏家を招くことも考えたが、よりシルクロード音楽の多様性や受容性、越境する音楽のダイナミズムをわかりやすく示すために、越境という出来事に関する演奏者自身の経験や実践、バックグラウンド及び演奏できる楽器の多様性を重視すべきという観点から、現在アメリカに在住する（かつてカナダに在住）中国音楽演奏家・韓梅（HAN, Mei）と、その夫であり日本、中国を始め多くの国の楽器を演奏できるカナダ人の音楽家ランディ・レイン・ロイシュ（Randy Raine-Reusch）を招くことにした。

彼らを招くもう一つ理由は、企画者と彼らとの繋がりである。韓は企画者とかつて同じ音楽楽団に所属し、現在でも親友である。韓は民族音楽学専門で、北京中国音楽研究所での修士課程を経て、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）音楽学院から修士号、博士号を取得した。現在、米国ミドルテネシー州立大学音楽学院准教授、同学院中国音楽・文化センター主任である。一方、有名な中国箏の演奏者として、カナダ在住時より、伝統音楽のみならず、現代音楽、即興音楽、電子音楽など様々なジャンルで国際的に活躍している。ソロ及びアンサンブルで

のCDも多く発表しており、受賞作もある。

ランディ・レイン・ロイシュは作曲／コンサートのアーティストであるが、特に非西洋楽器のために多くの創造的な即興音楽、世界音楽及び新興的音楽の作品を創作・プロデュースしている。また、マレーシアのボルネオ島の熱帯雨林の世界音楽祭の設立者である一方、フェニックス、アリゾナ州の楽器博物館のディレクターであり、シルク・ドゥ・ソレイユの顧問でもあった。音楽や音楽家について幅広く記録し講演も行っている。これまで20数カ国で演奏活動を行い、5つのドキュメンタリー音楽映画に出演した。さらに、日本の一弦琴、中国の古箏、及び尺八や巴烏（横笛）など日中の楽器に加え、シルクロード発とされる世界各地の民族楽器、特に笛類の楽器の演奏に長けている。

一般的に、30万の予算では、海外から一流の演奏家を招くことは困難であるが、友人関係の繋がりや、企画者の自宅での宿泊、通常よりはるかに安い謝礼、比較的安価な早割航空券の手配などの条件で合意し、来日が可能となった。幸いなことに、この催しを企画している段階で、長崎大学の重点研究課題「東アジア共生（共生するアジアの多文化社会）」のプロジェクト（ワンアジア財団寄付事業。代表葉柳和則、森川裕二他）の共催と資金の援助を頂けることになった。その面では、コンサートに合わせて講演も行うことになり、講演者に世界民族音楽学の分野で高名な民族音楽学家・徳丸吉彦先生を招聘することもできた。

徳丸吉彦先生はお茶の水女子大学の名誉教授であるとともに、現在は聖徳大学の教授である。専門は音楽記号学と民族音楽学である。音楽学と美学を主として東京大学で学んだ後、1982年ラヴァール大学（カナダ）で博士号取得。ヴェトナムの宮廷音楽の再活性化に努力してヴェトナム政府より文化戦士勲章を受章したほか、現在は国産の絹糸による切れにくい箏弦の開発の研究を行い、2013年には大日本蚕糸会より貞明皇后記念蚕糸科学賞を受賞した。*Music, signs, and intertextuality: collected papers* (Tôkyô: Academia Music, 2005)、『音楽とは何か：理論と現場の間から』（東京：岩波書店、2007）などをはじめ、多くの著書が出版されている。企画者が徳丸先生と知り合ったきっかけは、2000年に沖縄で開かれた日中音楽学会であった。

3 実施内容

今回のイベントは、2015年12月10日、16：10から17：40までの時間帯（5校時）に長崎大学文教キャンパスの長崎創楽堂にて行われた。

企画者による簡単な紹介の後、徳丸先生による講演が行われた。徳丸先生の講

演では、シルクロード音楽の伝播過程で、特に外来音楽の伝播と受容に長崎が果たした役割が強調された。そこではすくなくとも3つの事例をあげる事ができるといふ。

一つは江戸時代に長崎を通して日本に伝来した中国の音楽——明清楽、特にその中で用いられた楽器——月琴（シルクロードの楽器阮咸がそのルーツとされる）が、日清戦争が始まるまで日本全国に流行っていたこと。二つ目は、中國文人音楽に用いられた古典楽器七弦琴は明の逃亡人が長崎で始めたが、徳川光圀（水戸黄門）によって推薦され、弘前藩まで広がり侍階級をふくむ多くの人びとに好まれたこと。三つ目は、17世紀初期に來日したポルトガル人によって『日葡辞典』が長崎で作られ、そこに音楽という項目もあり、後にフランス語などにも翻訳され、日本にも音楽があることをヨーロッパに知らせたこと。また、後に長崎に訪れたシーボルトが長崎で覚えた歌を五線譜に書きおろし、それがオランダで出版されたことによって、ヨーロッパに日本の歌（音楽）が紹介された。

講演の最後に特に強調されたのは、文化触変のことである。すなわち、日本の音楽文化が常に異なる文化の接触による文化触変を受けていたことである。ここでは長崎系統の流れのように接触によって自然に発生した文化触変と、意図的になされたものがある。奈良時代の中国文化と明治以降の西洋文化の輸入は、歴史上、為政者達が意図的に文化触変を興した典型的な例とされる。

こうした文化触変は、人と人との接触によってもたらされてきた。たとえば異なる音楽センスや技術などを自分の楽器に取り入れたりすることもあった。また日本の古墳時代の楽器を調べてみても、その材質は大陸からのものであったことが明らかであった。音楽文化は孤立して生まれ存在し発展するものではなく、奈良時代に中国を経由して流れてきたシルクロードの音楽のように、常に文化が文化と接触しながら変化してきたのである。すなわち、長崎は西洋音楽そして東洋音楽が日本に伝来するための重要な繋がり、そして文化触変の地であった。

講演の後、ステージは楽器の演奏に移ったが、その解説及び司会は徳丸先生にお願いした。演奏された演目は以下の5曲である。

- (1) 粉紅蓮（ふんこうれん）
- (2) 曲十面埋伏（じゅうめんまいふく）
- (3) 彝族舞曲（いぞくぶきょく）
- (4) 祇園精舎
- (5) 東京カラス

(3)と(4)の間にはランディ・レイン-ロイシュによる各種楽器の紹介と演奏が

あった。

1曲目は韓梅による古箏の演奏である。演奏曲の粉紅蓮（ふんこうれん）は伝統的潮州（広東省）箏曲の一つであり、箏の繊細な技法を用いて、泥中の蓮花の美しい姿を描く。どんな汚れた環境にあっても、蓮の花のように純潔を保とうとする境地を表現するものであった。

続いて2曲目は企画者（王）による中国琵琶の演奏である。琵琶は西アジアから中国そして後にも日本にも伝わったシルクロードを代表する楽器の一つである。曲は紀元前202年楚の国と漢の国の決戦の場面をモチーフにした琵琶の代表的な曲「十面埋伏（じゅうめんまいふく）」である。大軍の布陣する有様、軍太鼓やラッパの響き、何万頭の軍馬が入り乱れて走り回る光景が、琵琶の高度な技法を駆使して描かれるものであった。

3曲目は古箏と琵琶の二重奏で、少数民族（いぞく）の若い男女が歌い踊る場面を表現する彝族舞曲（いぞくぶきょく）という現代曲を演奏した。

二人の演奏の後、ランディ・レイナーロイシュが登場し、piri（箏）、xiao（簫）、duduk（ドウドック）、nay（ネイ）、bawu（巴烏）、midjweh（エジプト楽器、シングルリードのダブルパイプ）など、いずれもシルクロードに由来する笛類の楽器を、徳丸先生とのトークを交えながら紹介し、楽器の演奏も行った。

次に、日本筑前琵琶（王）とネイ（レイナーロイシュ）による『平家物語』の冒頭を用いた琵琶の曲祇園精舎が演奏された。二人の外国人音楽家による日本音楽の演奏であるが、特に尺八の代わりに加えられたネイの即興演奏が新たな試みであった。

このように同じ西アジア起源とされる琵琶などの楽器は、日本と中国において、それぞれ異なった受容と変容の過程が見られる。日本の場合、楽器の多くは語り音楽として定着・伝承されてきたが、それに対して中国琵琶や古箏などは、高度な技術や広い音域によって、古典から現代まで幅広く演奏ができるような器楽音楽として発展してきた。一方、ネイという楽器から、中央アジアを起源とし、北アフリカから西アジアにかけて用いられる尺八系の縦笛類の繋がりも示されていた。楽器の多様性と繋がり、音や音楽を通して人間を知り、異文化を理解すると同時に、自文化を理解することに通じる。これからの共生社会づくりに必要な音楽の可能性と役割を、演奏会を通して学生に伝えることがこの企画の趣旨でもあった。

最後に古箏、日本の一弦琴、筑前琵琶による「東京カラス」という曲が演奏された。この曲はランディ・レイナーロイシュが一弦琴を習うために東京に滞在し



左から王維、徳丸吉彦、韓梅、ランディ・レイン・ロイシュ

たときの経験に基づいて、韓梅と共に作曲したものである。伝統的な音階や和音などの枠組みを超えた、東西音楽を融合する現代風の力作であり、二人によるアンサンブルの代表作でもある。この曲に筑前琵琶を加えるのは、今回初めての挑戦で、これまでまったく使ったことがない音階や打楽器風の技法などを用いることが、現代音楽に挑戦する筑前琵琶の可能性も示唆してくれた。ちなみに3人によるこの曲の演奏は、二人が来日してから約3時間のリハーサルで完成したものだが、音楽のセンスや演奏技術はともかく、音楽が民族や人種を越えて心を通じ合わせることを可能にするものだと改めて感じさせられた。

4 企画の運営・予算および課題

今回のイベントは、授業の一環として企画されたが、単に授業の受講生だけではなく、多文化社会の学生と教員、さらに音楽に感心がある大学の方々を対象として考えた。運営について特筆すべきは、この催しの実施、特にチラシ作りから会場設置、会場の受け付け、写真、ビデオの撮影などにあって、増田先生をはじめ、アフリカハウスで活動している多文化社会学部学生達の協力を得たことである。多文化社会学部にとっていろいろな意味で、アフリカハウスは教育実践の場であり、交流や繋がりとしての役割を果たしている。イベントやシンポジウムなど、様々な活動によって、専門外あるいは特に強い関心をもたない事柄に

関しても、たとえ受動的であったとしても何らかの影響を受け、結果として知識の習得や学習につながるものと思われる。

予算面では、国際旅費（海外演奏家の招聘）や謝礼などについては、主に授業に与えられた大学の助成金及び企画者自身の研究費の一部によって賄われた。国内旅費（国内の研究者招聘）については、長崎大学の重点課題「東アジア共生（共生するアジアの多文化社会）」のプロジェクト（ワンアジア財団寄付事業の援助を頂いたことに感謝している。

催しは盛大なものではなかったが、会場の参加者、講演者、演奏者自身が共に満足できたことの意義は大きく、成功を収めた。

しかし、これだけの一流メンバーで、今後二度と聴けないくらいレベルの高い内容の講演&コンサートであり、しかも、授業を多文化社会学生が来やすい時間帯に調整したにもかかわらず、残念ながら、予想していたとはいえ、多文化社会学部からはアフリカハウスの学生の以外ごく限られていた学生しか来ていなかった。このイベントに限らず、多文化社会学部が主催するイベントに自主的に参加する学生が少ないことは、一つの課題であり、今後の工夫や対策が求められる。

最後に、本企画の実施や運営に当たって、大変お世話になった増田先生及びアフリカハウスの学生、資金援助をくださった「共生するアジアの多文化社会」のプロジェクト及びイベントにお越し頂いた多文化社会学部の先生の皆様に衷心より感謝の念を表したい。

注

¹これは1930年、当時の東京帝国大学で初めて開設された「日本音楽の歴史及び理論」という講義に田辺先生が述べた言葉である（吉川1969：4）。

参考文献

- 拓殖元一（1992）『シルクロード 楽器の旅』音楽之友社
平野健一郎（2000）『国際文化論』東京大学出版会
吉川英史（1969）『邦楽と人生』創元社